

藤女子大学紀要, 第 49 号, 第 II 部: 155-166, 平成 24 年.  
Bull. Fuji Women's University, No. 49, Ser. II: 155-166. 2012.

# 自主活動としての学内「子ども広場」活動の検証

— 短大保育科・大学保育学科の取り組みを追って —

杉 浦 篤 子

## Abstract

The Department of Early Childhood Care and Education at Fuji Women's University has been providing a playground for children during our university festival every year since 1991. In this age of declining birthrate, this activity offers our students an opportunity to directly interact with children. In addition to this playground, we have been providing another playground where parents and children in the neighborhood can play together. As the need for socially-assisted childcare has increased in recent years, these activities provide a foundation on which we can develop and implement a curriculum to teach childcare assistance. These activities also promote students' independent learning. We will continue to provide these facilities, and examine the history and operation of these activities to date.

## はじめに

2000 年藤女子短期大学保育科が改組し、4 年制大学保育学科となって今年 11 年目を迎えたが、短大時代に始まり、大学に改組後にも継続された同一の名前を持つ 2 つの活動がある。

まずその一つ目の活動は、1991 年短大保育科 2 年生有志たちが大学祭の 2 日間、第一回目となる子ども広場「どんぐり広場」を開催した。場所は北 16 条校舎の地下体育館、1 グループで学生の数は 20 数人であった(当時は 50 人定員)。遊びの場 3～5 ヶ所、人形劇を用意し、子どもたちの参加を待った。この広場は大変好評で、後輩たちに引き継がれ、翌年もまた同様の子ども広場が開かれた。この子ども広場がきっかけとなり、大学祭の子ども広場「どんぐり広場」として継続していった。少子化で兄弟も少なく、周囲に遊んでいる子どもたちを見かけないという環境で育った保育者を目指す学生たちに子どもと直に接する機会を設けたいという目的で開催したものである。

もう一つ目の活動は週末に開かれる親子参加広場「どんぐり広場」である。保育者養成課程がある大学の中で子どもの声が聞こえる時があっても良いのではないかということからも、毎週土曜日に

に学生の有志と教員 3 名による子育て支援を視野に置いた親子参加の広場、名前も同じ「どんぐり広場」を開設するに至った。大学祭と週末毎に開かれる親子参加広場が「どんぐり広場」と同じ名前なので大変紛らわしいが、ボランティアという共通点を有機的に結びつけるため、あえて同じ名前にした。その意図が学生にも参加者にも浸透して藤学園で行なわれている子どものための遊び広場と認識され、学生、参加親子に混乱はない。

2011 年現在、子育て支援は授業となり、親子参加の広場は「おててつないで」と名称は変ったが継続され、大学祭の「どんぐり広場」も学科行事として位置付いている。担当者が両活動に共通して参加していたこともあり、両活動を両輪として授業にも結びつけた。学科開設 11 年目を迎えて、2 つのどんぐり広場、即ち大学祭「どんぐり広場」と週末に開く親子参加型の「どんぐり広場」の足跡をたどり、その経過と広場を経験した学生の反応と教育効果などについて考察するものである。

# I. 1. 大学祭「どんぐり広場」と親子参加広場の連携年表

	大学祭「どんぐり広場」	親子参加「どんぐり広場」
1991 年	短大保育科 2 年生有志が遊びの広場として、 第 28 回大学祭に「どんぐり広場」を開催。 全くの学生自主活動 場所：地下体育館、担当 2 年生有志 資料 1. 1991 第 28 回大学祭 どんぐり広場 第一回 チラシ	
1992 年	場所：地下体育館 担当 2 年生 自主参加の有志 遊び場 4 ～ 5、影絵人形劇	
1993 年	場所：地下体育館 1・2 年生全員 資料 3. どんぐり広場の内容 体育館使用状況	
1994 年	旧理科室が美術室になったが実験台がそのままの状態では使えないため、地下体育館使用となった。  場所：地下体育館 1・2 年生全員参加	4 月 親子参加「どんぐり広場」開設。 参加教員：杉浦他 2 名 短大発達心理ゼミ生 10 名 家政科移転後改修され保育実習室設置。 毎土曜日 10：30～12：00
1995 年	保育実習室 1 室で両広場開催。 花川キャンパス大学祭実行委員から、花川キャンパスでの「どんぐり広場」開催を要請される。 石狩私立幼稚園連合より、キッズフェスティバル開催の要請、5 年間続く。	参加学生有志が定着、しかし参加親子数は少ない。金曜日準備、大学の物置から借りた机、椅子などで遊び道具を工夫。
1996 年	絵画室の実験台撤去、実習室と隣り合わせて開催できるようになった。 16 条・花川両キャンパスでどんぐり広場	学生有志定着。 フィンガーペインティング 子どもたちには汚れないようにビニール袋を用意し、服の上から着る。
1997 年	花川大学祭が先に開催され、どんぐり広場は 16 条大学祭よりも早く準備することになる。	保育担当新任教員が着任し参加。 担当教員実質 2 人から 3 人になった。 <b>*実習室改修、窓を大きくし、理科実験で染み付いた臭いも取り、子ども用水場設置。</b> 学生のお母さんがトイクロスで「的あて」やボールを作成してくれる。毎回使用する。
1998 年	大学祭入場者数は、2 日間で 100 組以上の親子が参加。 校舎となりにある保育園の子どもたちが、朝一番のお客として来てくれる。	学生有志定着。 新聞紙の迷路、色水遊びなど。 資料：4. 5.
1999 年	16 条校舎最後の「どんぐり広場」	学生有志定着。 実習ノートの書き方など指導。

2000 年	<b>16 条校舎から移転、花川校舎</b> 花川校舎、藤花祭に参加。 この年は大学 1 年生が「どんぐり広場」、短大 2 年生が「どんぐり劇場」を行う。	<b>16 条校舎から移転、花川校舎</b> 4 年制大学 保育学科スタート。 カリキュラムに位置付けた。 広場活動の終了前 30 分を、子どもたちに見せる活動、手遊び、紙芝居、人形劇などの発表の場とした。
2001 年	2001 年～ただし 2009 年より、2 年生の担当は実習担当者になる～活動は現在も継続。  資料 2. 2009 年 藤花祭 チラシを周辺の幼・保育園、小学校に配布。	2001 年～2004 年 2 年生全員参加とした。 2003 年 子育て支援として科目を立ち上げ、カリキュラムに組入れた。  2004 年 担当者として新教員着任 2005 年 授業開始 「子育て支援 理論」通年 2 単位 「子育て支援 実践」通年 2 単位

## 2. 大学祭どんぐり広場

### 1. 経緯

1991 年、藤女子短期大学保育科 2 年生有志が、16 条キャンパス第 28 回大学祭に遊びの広場として「どんぐり広場」を開催。場所：地下体育館。

学生たちの自発的活動で、教員は関わってはいない。

1 グループで遊びの場と人形劇を交互に行い、地下体育館へ子どもたちを誘導する事が課題となった。人形劇は同じ物を繰り返す。たいへん好評だったため、短大 2 年生が中心となり、その後へ継続することになる。

1992 年、場所：地下体育館、2 年生有志

地下体育館への誘導が課題となった。ミッキーマウスマーチを使い、校舎内を歩き子どもたちを誘導。

1993 年、遊びと広場が別グループとなった。

この年から、大学祭「どんぐり広場」は 1 年生担当、2 年生「どんぐり劇場」担当となる。

場所：地下体育館 2 年生と 1 年生が場所を分け合いながら使用。

1994 年、大学祭「どんぐり広場」「どんぐり劇場」1・2 年生全員参加、地下体育館

平成 7 年、大学祭「どんぐり広場」「どんぐり劇場」1・2 年生全員参加、会場を地下体育館から、保育実習室へ移し、廊下へはみ出すようにして 1 室で行う。

花川キャンパス大学祭実行委員から、花川キャンパスでの開催を要請される。

ンパスでの開催を要請される。

16 条キャンパス大学祭が先に行われていたのので、そのまま道具類を搬送し、「どんぐり広場」を開催。花川校舎 1 F 食堂。

どんぐり広場・どんぐり劇場を開催、どちらも 2 年生が担当した。

花川は石狩市民の参加が多く、「どんぐり広場」には多くの小学生が参加してくれた。その結果石狩市民からは大変好評との評価を受ける。以後、花川大学祭にも継続して開設ということになる。

花川大学祭に来学してくれた石狩私立幼稚園連合より、PTA 主催のキッズフェスティバルに「どんぐり広場」開催の要請があり、5 年間続く。場所は石狩市内の幼稚園の持ち回り。道具などは PTA の人たちが 16 条校舎から運搬。

平成 8 年

絵画室改修 理科室を美術室に転用していたため理科用実験台が据え置かれたままだったが、理科実験用の実験台を取り払うことができた。

大学祭 「どんぐり広場」絵画室、「どんぐり劇場」保育実習室、隣り合わせで出来るようになった。

1997 年～1999 年

当時花川キャンパスと 16 条キャンパスの大学祭の開催時期は交代だったため、1997 年は、花川大学祭が時期として先に開催され、どんぐり広場も参加のため 16 条大学祭よりも早く準備することになる。その結果本番の 16 条校舎大学祭では、感激が薄れて 2 年生の協力体制が整わないと

いう姿もあった。

その後負担が大きいということから、2年間ほどで花川大学祭でのどんぐり広場は、実行委員の手に委ねることになる。

- \* 北 16 条校舎隣にある保育園の子どもたちが、一番初めのお客として来るようになる。
- \* 遊びの場は 5 ～ 6 種を準備。
- \* 大学祭の入場者数は 2 日間を通して 100 組を超える参加者があった。

2000 年、4 年制大学保育学科となり、キャンパスを花川に移す。

第 9 回 藤花祭 9 月 29 日午後準備、30 日・10 月 1 日公開、10 月 2 日後片付け

短大 2 年生、大学 1 年生、3 年次入学生だけの学年構成のため、短大 2 年生が「どんぐり劇場」、大学 1 年生が「どんぐり広場」を担当。

保育実習室(どんぐり劇場)、保育実習準備室(どんぐり広場)

16 条キャンパス大学祭にも開催を要請される。  
16 条校舎 3 階の教室一室で開催。

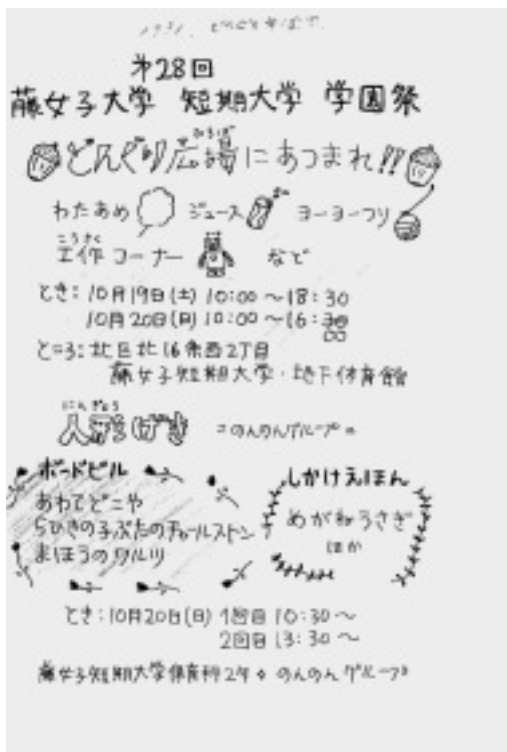
- \* 準備として、2 ～ 3 日前に石狩市内の全幼稚園、保育園に子どもたちが持ち帰ってくれるように、人数分のチラシを配布。

2001 年、第 10 回 藤花祭 10 月 12 日準備・13 日・14 日公開・15 日後片付け  
「どんぐり劇場」・「どんぐり広場」

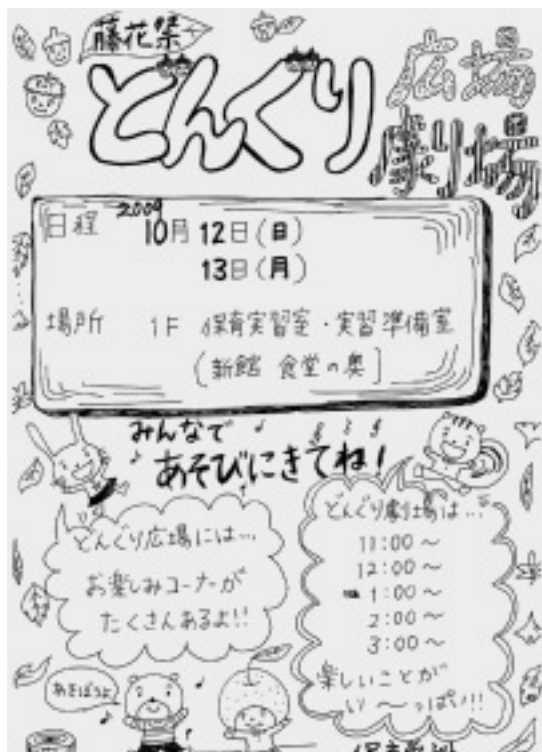
- \* 担当教員の授業「保育内容（音楽的表現）・（造形的表現）」の中で、幼稚園教育要領にある内容にのっとり、子どもをより具体的に知るための活動として「どんぐり広場」を組み合わせた。  
2 年生の「どんぐり劇場」は毎土曜日開催の親子広場での 30 分活動を組み合わせる。

2002 年、第 11 回 藤花祭 11 月 2 日準備・3 日・4 日公開・5 日後片付け  
「どんぐり劇場」・「どんぐり広場」

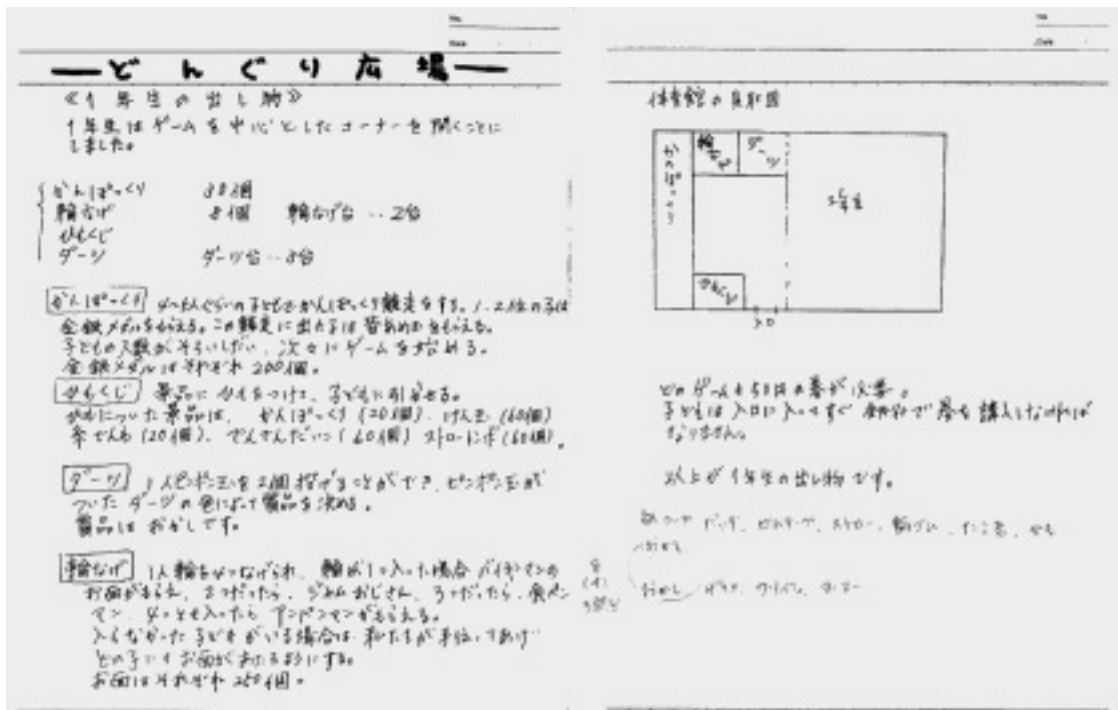
2003 年、第 12 回 藤花祭 10 月 11 日準備、12 日・13 日公開、14 日後片付け  
「どんぐり劇場」・「どんぐり広場」



資料 1. 1991 年 第 28 回 学園祭  
第一回目「どんぐり広場」チラシ



資料 2. 2009 年 第 18 回 藤花祭  
「どんぐり広場」チラシ  
石狩市内全幼・保育園に配布



資料 3. 1993 年「どんぐり広場」1 年生計画表 一回の遊びが 50 円だった事が分かる。

2004 年～2011 年、現在も継続して両広場を開催している。

板、会場案内、どんぐり銀行)、遊び場、景品づくりの作業を続ける。

## II. 1. 大学祭「どんぐり広場」・「どんぐり劇場」の概要

大学祭では「どんぐり広場」と「どんぐり劇場」が同時に開催される。子どもたちにお祭気分を味わってもらうために、会場の飾り付け、遊びの場の工夫、持ち帰ってもらう景品など全て手作りのため、準備には3週間を要している。

- 1 回目：「どんぐり広場」についての説明、グループ分け、内容の検討
- 2 回目：制作、チラシ
- 3 回目：大学祭準備日：会場づくりは普段、実習準備室は文字通り実習の準備のために使用する机や椅子、制作途中の作品、材料などを保管する棚や、台などがある。それらを全て別の場所に移動し、何も無い部屋にする。かなりおおきく物品を動かすので、学科教員、学生たちが皆で作業する。  
その後、飾り付け、共通のもの準備（看

1. ① 「どんぐり広場」1年生全員参加  
(大学祭当日はローテーションを組んで参加、大学祭にも参加する)  
前日 会場作り 遊びコーナー設置  
1日目 10:00～16:00  
2日目 10:00～16:00 片付け
- ② 場所: 1階 保育実習準備室
- ③ 内容: 子どもたちとの遊びの広場 定員 80名  
1グループ10名 8グループを作りそれぞれ遊びの内容を検討する。代表者1名
- ④ 縁日で遊ぶ気分を味わうための準備
  - ・遊びのコーナーに参加するおもちゃのお金。
  - ・100円分をまず買ってもらう、一回の遊び10円。
  - ・学生は、料金をいただくことの意味を考える。
  - ・造形的遊び・音楽的遊び・身体を使った遊び・知的遊び・年令を考えての遊び。
  - ・子どもの遊び方を予測して、制作する。
  - ・グループで内容に偏りがないように。
  - ・作る物、目的と素材の組み合わせ、材料、作る

ための道具、適した画材、使い方。

- ・「どんぐり劇場」の間は「どんぐり広場」を観客動員のため閉店することもある。
- ・1年生は交代で2年生が発表する「どんぐり劇場」を来年のために見ておく。

## 2. 「どんぐり広場」主な活動例

遊び広場の定番として、「魚釣り」「宝探し」「ペットボトルボーリング」「玉入れ」「球当て」「迷路」などが入れ替わり、登場した。

- ・「遊びのコーナー」の構成には、年令による発達差、男女の性差、知的活動と身体的活動のバランス、運動能力などを考慮し、組立てる。

ボールを投げる、ころがす、スタート地点を年令別に3種類に色別にして貼り付ける。

ゲームに使用するボールの色を変え、色による男女の好みに差があることなどを観察するなどに視点を置く。

### 2. ① 「どんぐり劇場」2年生全員参加

#### ② 1階 保育実習室

準備日 会場作り

子どもたち用にマットを敷く。折りたたみ机で、舞台袖をつくる。

人形劇用台、キーボード、パネルシアター用台、ペープサート台などを設置。

暗幕を必要とする演目がある時は、暗幕を借りておき、部屋を暗くする。

1日目 1回目 11時 2回目 12時

3回目 13時 4回目 14時

2日目 1回目 11時 2回目 12時

3回目 13時 4回目 14時

片付け

#### ③ 内容：

- ・子どもたちに見せる人形劇・パネルシアター・ペープサート・劇・その他各種パフォーマンス
- ・時間 1グループ 20分から30分
- ・前後に歌・手遊び・クイズ・手品などを行なってもよい。
- ・必要な物については教員または教務助手に相談、
- ・演目が決定した段階で報告。内容が重複しないように調整。
- ・担当の時間以外はフリーなので、自分が所属する部活動やゼミなどの出店に参加可能である。

#### ④ グループ分けと代表

8グループ 全体の代表者2名と各グループに一人の代表者をおく。1グループ10名～12名くらいとなる。

#### ⑤ その他

- ・観客は10～20組前後の親子。
- ・時間帯により観客数が異なる。お昼前後に集中するが、何度も見に来てくれる子ども、始まるまでじっと廊下で待つ子どももいる。
- ・「どんぐり劇場」の間は、「どんぐり広場」の子どもたちを勧誘するが強制はしない。

劇場の構成においては、幼稚園、保育園では見せる活動が必ずといっていいほど日常の活動の中に存在する。年令と内容、方法、題材、子どもたちは何を、どのように楽しみ反応するか、その反対にどのようなものには反応しないのかを知る場となる。他のグループの題材などからも学ぶことは大いにある。

「どんぐり広場」で大変興味深かった例をあげたい。

- ・「いくつ つめるかな」さまざまな大きさの箱、缶、筒などを色画用紙で包み、いわばいろいろな色の積み木を準備。どれとどれを組あわせたら、高く積み上げられるかをゲームとした。男女を問わず、子どもたちが、積み上げるのに工夫をし、集中している姿を見る事ができた。
- ・「色水で描こう」普段家庭での遊びで、「だめ！」と言われる遊び、家の中では出来ない遊びをしてもらおうということで、ブルーシートをコーナーや床に敷き詰め、壁に模造紙を貼り、色水の入った水鉄砲で、絵の具を吹きかける。もちろん子どもたちは嬉々として、色水遊びに興じた。
- ・「迷路」迷路遊びは、定番と言えるものではあるが、この年の「迷路」は迷い道ではなく、細いトンネルをくぐり、広くなった中心部でゲームをし、再びトンネルを抜けて出てくる。子どもたちにとって、暗い、狭いということはとても恐怖心を伴うことで、中から「こわーい」という声が出る時もあったが、中で、学生が待機し、ゲームを用意し遊ばせて、帰すという、大変興味深い遊び場になっていた。
- ・「お弁当作ろう」昼一昼大の四角い箱、これが弁当箱になる。ここに中身をつめるというもの。お弁当の手遊びに出てくる具材が中心になって、

いろいろな風合いの布を探し、準備・制作された。ご飯は幕の内にみられるような小さなお結び状になっている。卵焼き、かまぼこ、鮭、コロッケ、野菜などなど。子どもにとってはかなり大きなサイズに作られたそれぞれの具材を、お弁当箱に詰めていく作業は、子どもたちが予測をしながら完成に向けて作業が出来ることを、示すものであった。

- ・「**水のない水族館**」教室の一角に青いビニールを使い、ビニールハウスのようなトンネルをつくり、その中にスズランテープを張り、水を表現。中にさまざまな水中の生き物、鯨、ナポレオンフィッシュ、くらげ、蟹、ほうぼう、平目や鯛といった具合のものを配置。子どもたちはそこを潜り抜けるというもので、水中体験をする事ができた。

毎年来てくれる子どもたちが多く、子どもたちのほうが前年の遊び場を覚えているので、その反応は結構嬉しいものであり、学生たちの良い経験の場となっている。

### 3. 「どんぐり劇場」主な活動例

どんぐり劇場は一回の公演を20分から30分とし、子どもたちに見てもらう活動を組み立て、保育学科で学んだ子どもも理解の一部なりとを生かした内容を組み合わせることを目的としている。また、毎土曜日行なっている親子広場の最後30分活動も大いに利用した。

- ・「**くるくる箱めぐり**」ダンボールで同じサイズの立方体を作り9個用意、9×6面それぞれに物語りの絵が貼り付けられている。9個揃うと物語が完成するというものである。物語は子どもたちがよく知っている題材を選んだ。
- ・「**絵描き歌で遊ぼう**」ホワイトボード2枚を並べ、周囲は野原のような装飾がつけられている。マジックで、絵描き歌に歌われている動物たちが登場し、物語が続けられていく。また、切り紙や、連続切り紙などが手品のように登場し、ホワイトボードの上に、お話しの世界が展開した。
- ・「**ママ、ママ、おなかが痛いよ**」影絵芝居。絵本を題材に、何でも食べてしまってお腹がパンパンになってしまった男の子が、名医のお医者様

に、助けられるお話。影絵の部分と実際の人間が現われる部分とを組あわせ、男の子のお腹から取り出した、奇想天外な物、到底食べられない物を実際に見せることをした。

現在は、2年生で行なっている実習との相互関係も見られ、いろいろな事を経験することが必要である事を感じる場になっている。

## III. 親子参加型広場「どんぐり広場」設置と経緯

1994年、親子参加広場「どんぐり広場」スタート

16条校舎2階、家政科実験室を改修後、保育実習室が出来たことで、短大保育科2年生発達心理ゼミ生が担当で親子広場を計画。

教員；杉浦他2名

毎週土曜日、10：30～12：00、

- ・保育科のある大学内に子どもの姿があってもよいのではないか。
- ・子どもに接する機会が少ない学生のために、授業ではない状況で子どもたちと過す場を作りたい。
- ・2階、実験室改修の部屋（保育実習室）があるだけ。遊具、道具は皆無。木製丸椅子数客。
- ・近隣商店にポスターを貼る。
- ・数組の親子と学生たちでスタート。

1995年、学生たちの参加が定着、充実してくる。

机、椅子などを組み合わせて、滑り台などを毎回設置。

1996年、中心となる学生定着

なかなか授業では子どもと一緒に経験が出来なかったフィンガーペイントをしてみる。家政科から譲り受けたデコラのテーブル面に絵の具を流し、自由に手を使って絵を描く。子どもたちは絵の具で汚れないように、大判のビニール袋をエプロンにする。

1997年、保育関係科目担当新任教員着任 広場に参加 実質2人担当だったところ3人となる。

実習室を改修 実験用ロフトなど撤去 子ども用水場設置。

学生のお母さんがトイクロスで大きな「的当て」などの手作りのおもちゃを作り寄付してくれ、毎回使用する。

1998 年、学生有志定着

- ・すずらんテープ、新聞紙で、部屋いっぱいの迷路を作るなど、学生たちは毎回工夫をする。
  - ・ペットボトルに量が違う綺麗な色水を入れ、その感触、水の混ざり具合を楽しむ。
  - ・**傷害保険をかける。**
- 終わりの 30 分、学生たちの発表に使う。

前日に相談し用意・季節、行事にも配慮

1. 最後の出し物にあわせた手遊び
2.                   〃                   絵本
3. ゲーム
4. 人形劇・ペープサート・パネルシアター・紙芝居

1999 年、数年かけてマット購入 短大最後の年となる。

2000 年、石狩市花川校舎 4 年制大学保育学科スタート

短大 2 年生と短大からの 3 年編入生有志

- ・保育実習室 毎週土曜日 10:30~12:00
- \* 石狩市内の商店などにポスター掲示、新たに参加親子を募集する。短大から引き続き参加してくれる親子もあった。

2001 年~2004 年

- ・参加親子数が増加する一方、参加学生有志が土曜日のためアルバイトや部活のため少なくなり苦労する。
- ・実習授業と抱き合わせ、2 年生全員参加とし、年間 4 回参加を義務付ける、後に 2 回とする。
- ・終わりの 30 分の発表を、大学祭「どんぐり劇場」に結び付ける。
- ・遊具などを購入するための学科予算がつく、交誼台・積み木など購入。

2005 年、子育て支援が社会的に必要と認知され、カリキュラムに位置付ける。

授業「子育て支援 理論・演習」となり、親子参加広場は「おててつないで」に名称変更し、現在も継続。

#### IV. 考察

##### 1. 大学祭「どんぐり広場」・親子参加広場「どんぐり広場」の活動

現代の核家族化や少子化の影響で保育学科に入学した学生のなかには「子どもが好き」というだ

けで、そこには実体としての子ども像を持っておらず、保育職への具体的なイメージに欠けているものも多い。実習における集団生活での子どもの姿と違い、「母と子」「父と子」「兄弟・姉妹の姿」といった家族の一員としての子どもの様子を見ることにより、より自然な子どもの姿に触れ、子どもを可愛いと思い保育学科へ入学したことへの動機付けがなされる場にもなっている。子どもたちが嬉々として遊びに集中している姿は、まさに貴重な生きた教材となってくれている。子どもたちに「どんぐり広場のお姉さん」と呼ばれることにより「先生」と「学生」の間の中間地帯で、肩肘張らず、リラックスして子どもたちと思い切り自由に遊ぶ事の大切さを感じとる場となっている。

大学祭「どんぐり広場」は、保育学科に入学して半年経った後期に、授業として準備を進め、開催する。幼稚園教育要領において「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」と謳われており、そのなかでも「幼児の自発的な活動としての遊び」「心身の調和のとれた発達の基礎を培う」「遊びを通しての指導」の重要性があげられている<sup>註1</sup>。本学科においては保育内容系の授業が 1 年生では少なく、子どもたちと触れ合う機会も少ない事もあって、1 年生たちが、子どもが遊ぶことを想定し、また仲間たちと協力して一つのものを作り上げその反応から答えを得る、という生の経験をする事が出来る機会としている。どんな事に、どのように、子どもたちが楽しみ、集中するのか、つまらなそうにするとしたらどんな事を目にあたりにする事が出来る。また、大学祭であることから、いろいろな年令の子どもたちが同時にやって来るので、年令差による反応の違いも見ることが出来る。親子で参加しているので、親たちの反応もまた、1 年生にとっては大変貴重な経験となっている。実際に子どもに出会い、自分達が考え、制作し、設置した遊びが、授業ではない場において学生も自由に、子どもたちと共に、遊びを通して経験をする事が、後に役立ってくる考える。毎年来てくれる子どもたちが多く、小学生になっても、また兄弟姉妹たちが来てくれるので学生たちは先輩たちとは違う遊びを考案していく事にもなる。

また制作においては、素材選び、使用する道具、彩色用画材、制作する物の大きさなど多角的に考





資料 4. 5. 16 条校舎 保育実習室 親子参加広場「どんぐり広場」新聞紙迷路

える経験にもなっている。

2年生の「どんぐり劇場」でも、手遊びから始まり絵本、紙芝居、ペープサート、人形劇、パネルシアター、ダンスや本当の人間による劇などを組み合わせ、一つの公演の形にして、子どもたちに見てもらう。どのように子どもたちが集中していくか、どのような反応が返ってくるか、子どもたちが理解してくれているか、一人よがりになっていないかななどを、多くの場面で経験させてもらう場になっている。

一日目4回、2日目4回の上演、全部を通して見てくれる子どももあり、同様に、毎年見にきてくれる子どもたちが多く、マンネリ化に陥らないよう工夫が必要とされている。

2011年 1年生 学生たちの感想文から

1. 目的
2. ねらい通りだったか
3. 感想・気付き

「すすめストリート」

1. トンネルや新聞紙で作った砂利道を歌に乗せて通ってもらうことで、身体を動かし、歌も楽しめる遊びにした。
2. トンネルを通るのを怖がる子どもがいて、最

後の滑り台だけやることがあった。クモの巣をくぐってもらいたかったが大きい子は跨いで行こうとした。

3. 制作は時間がかかって大変だったが、みんなと作るのは楽しかった。子どもに触れ合う場がなかなかないので、久しぶりに手をひいて歩いたり、お話ししたりして、やっぱり子どもは可愛いなと思った。子どもはもちろん、親にも楽しかったねと思われるようできたらいいなあと感じた（子どもが楽しそうにしていたら、親も楽しいのかな）。

「もぎもぎフルーツ」

1. 身体を使って物を取る力（力加減）
2. 思ったよりもたくさん取ってくれた。楽しんでくれていた。
3. 今まで、授業で制作したものが子どもに直接影響することはなかったが、今回は子どもが遊ぶことを前提に作ったことで、安全面などを含め、様々な課題をみつける事が出来た。

安全を考えて靴を脱ぐ方式を選んだが、子どもがあんなにも靴の脱ぎ履きに時間がかかるとは思わなかった。実際に目にして学べた。子どもたちはどのようなことが好きなのか、楽しいのかを考えさせられた。

「魔法にかけられて」

1. 杖も自分で作ることによって、工作の時間をとり、集中力を鍛え、心を落ち着かせ、自分で作ったもので扉が開くことで、自尊心がつくように。
2. 何回も来てくれる子がいた。計画どおり遊んでくれた。

絵が苦手な子や小さい子のためにシールを用意したのですが、シールと絵を上手に使って制作してくれたので、嬉しかった。

3. 初めて本格的に子供たちのために遊びを提供できたことは、とても貴重な経験でした。どうしたら子どもたちが喜んでくれるかと真剣に考え、実際に子どもたちの行動から学ぶ事がとても多かったです。

当日は子どもたちが、お母さんの指摘にも耳をかさず、自分で作ろうとする姿が、やっぱり子どもは自分で作ることが好きなんだなあと実感しました。

「玉いれポンポン」

1. 玉を何個入れられるか、また入れることが出来た達成感。
2. 私たちは何個入れられるかを目的としたが、子どもたちは何度も試すうちに、全部入れた！と何度も来てくれた。
3. どんな遊びが子どもたちは楽しめるのか悩んだが、「玉を入れる」というわかりやすい遊びになった。自分達が思っている以上に、何度も来てくれる子がいて嬉しかった。

「ぼくもわたしももたろう」

1. 水鉄砲でティッシュペーパーを撃って、鬼を倒す。さる、きじ、犬にキビだんごをあげて仲間になる。
2. ほとんどの子たちが「白いティッシュの部分撃ったら鬼が落ちるよ」と教えてあげると、ちゃんとやってくれた。
3. いろいろな子がいて、さる・きじ・犬がくちをあけている像を見て泣いちゃった子がいたり、景品はいらないからいっぱい撃って遊びたいという子などがいておもしろかったです。待っているときに桃太郎の歌と一緒に歌おうとして、数人が歌を知らなくて、少しびっくりしました。日本の昔話を知らない子もいるんだとわかりま

した。

## 2. 親子参加広場「どんぐり広場」

ボランティア活動としての位置付け

- ・授業ではないので教員の評価を気にせず行動できる。
- ・参加する日を選べる。
- ・学生の考えを尊重、学生が主体的に環境設定・準備をする。

上記の事から、学生たちは「やらされている」のではなく自分たちの考えで行なっている自主活動としての満足感があり、学習効果も高い。

また自主活動足りうる一番の理由は、授業ではないことから、実習などで常に感じる「教師の目」から開放された学生は、大変生き生きしている。時には羽目を外すこともあるが、失敗を恐れなくなる。「父母の目」も初めは気になるようであるが、すぐに慣れるのはやはり親御さんたちの眼差しの温かさゆえであろう。レポートには「お母さんたちから、いろいろなお話しが聞けて勉強になる」との感想が多く見受けられる。

## 3. 親子参加広場「どんぐり広場」の活動と学生の有機的な関わり

- ・前日の金曜日にまず掃除から始まり、環境設定をする。
- ・前日に遊びのコーナーの準備、絵本の読み聞かせや人形劇・ペープサート、手遊びなどの演目を選定し、練習をする。
- ・当日は「どんぐり広場」の受付から始まり、終了までを経験する。
- ・子どもたちを見送った後、掃除をし、出した道具を元の場所に返し部屋を片付ける。
- ・修了後に反省会をし、その日のうちに疑問や感想などを出し合い話し合う。
- ・1週間以内にレポートを提出することで、反省会でもれた点や疑問点、自己評価を記録し確認する。

上記のように実習とは異なり、学生は保育時間の一部に関わるだけではなく、実習室の掃除、遊具の消毒、安全のための点検と共に、季節の花などを飾ること、行事の取り込みなど環境設定に気を配る。これは就職した後、求められる総合的実

践力の基礎となる。

次に動的活動のためのマットや滑り台のコーナー、制作コーナーなどの「遊びの広場」としての準備をする。この時重要視したのは、学生同士が相談し議論し合って「その日の広場をどのようにするか」を子どもの行動を予測して準備することである。教師は出来るだけ学生の自主性に任せ、口出ししないようにする。あらかじめ指導を受けた指導案どおりに実践する実習とは異なる点である。遊びを予測し、その結果を分析することにより、子どもの興味、能力その発展をみることで出来、失敗もまた勉強になっていた。

修了後必ず行う反省会では、この予測と結果についての食い違いや、思いがけない子どもの行動について話し合いをするが、多くの学生は普段より饒舌に発言する。これは、予想に基づきなされる自主活動が、上手くいってもいなくても結果に非常に関心を持つことになり、学習効果が高いためと思われる。

秋の大学祭には毎土曜日の「どんぐり広場」をいわば卒業した子どもたちや親御さんたちも顔を見せてくれるなどの交流が続く。さらに、このような活動が地域に認められるにつれて「子育てサークル」や幼稚園の PTA 主催の「キッズフェスティバル」や「児童館」「区立図書館」や近隣の保育園などからボランティアの要請があり、一度ボランティアの魅力を知った学生たちの活動は広がりを見せ始め、学生たちは大学の外にも活動の範囲を拡げることになっていった。このような機会を得ることで、子どもの前で緊張することなく、自身をつけ、中には「私は「どんぐり広場」に参

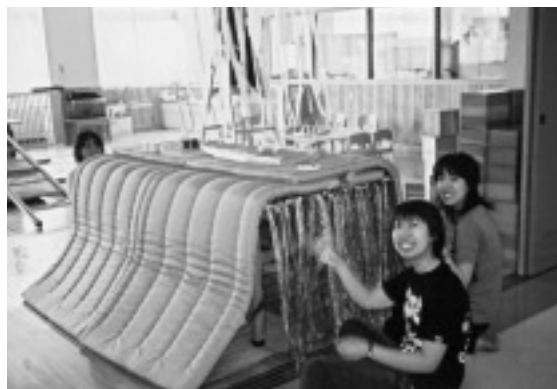
加することで、就職直後から子どもの前で堂々と振舞う事ができた」と喜ぶ学生が多かった。

学生たちにボランティア精神が根付くと繰り返し広場の活動に参加するようになり、新たにグループを作り幼稚園、保育園を訪問するという活動も生まれている。

## V. まとめ

自分達で考えた遊びのコーナーで子どもたちが喜んで遊んでいるのを目の当たりにして「私たちのどんぐり広場」という良い意味での錯覚と、仲間たちと共同体験をしたという意識、それに伴う満足感があるようである。

親子参加広場「どんぐり広場」では最初、部屋があるだけ、何一つ無い状態から学生たちは遊びを考えだした。机を台に、滑り台を工夫した事もある。花川校舎に移転してからも玩具や道具はほとんど無く、少しずつマットや積み木などを揃えていった。当時は幼稚園年長の男の子たち、その兄弟である小学校低学年の男の子たちなど活発な子どもたちが来てくれている状態だったので、机やマットを組あげて室内アスレチックのような遊び場を作り上げていた。毎週子どもたちはどんな遊び場が設定されているかを楽しみにしており、学生たちもそれを承知で毎週変化をつけて工夫していた。机の上に上っていると驚かれた節もある様だったが、週休 2 日が定着し、兄弟姉妹で来てくれるケースが多くなっており、年令が上の子もたちの遊びを考える必要性からのものだったと理解している。親子参加であることから、現代の



資料 6. 7. 親子参加広場「どんぐり広場」の会場設定

マットや机などを組み合わせ、遊び場を作成

子供に見せる時間 パネルシアター

母親像を垣間見ることも出来、また少しずつ父親の参加も見られるようになった。母親、父親と直接話す機会は学生には少ないことから、生後数か月の赤ちゃんを抱かせてくれる母親、母親に付き添う父親の姿など貴重な経験をさせてもらっている。授業での学びを子どもたちの実際の姿を通して確認し、また自分のなかでの問題点などを探る機会にもなっている。

#### 「絵画・制作コーナー」

「どんぐり広場」の一角は特別な行事を組まない限りは制作コーナーを設置する。子ども用机と椅子、画用紙、クレヨン、糊、はさみ、折り紙。子どもたちが自然に寄ってくるまで、見守る。椅子に座り何かを書き出そうとした頃に、学生たちが近寄り、描いている様子を観察する。新しい画用紙を追加したり、糊の介助などをする。学生たちは子どもの絵については3年生で学ぶため、まだ知識は少ないが目の前で幼児特有の絵を描く姿に、驚きと感動を示す事が多い。卒業研究のテーマにつながる場合もある。

さらに卒業研究のために、子どもの観察、お母さんにアンケート調査に協力していただく事もあった。保育士や幼稚園教諭への動機付け、理論と実践の相乗効果が高められ、保育者養成の入り口としての役割と、地域の人々とのつながり、子育て支援という社会への接点として意味あるものとなっていると考えられる。

いずれの活動も、保育学科に入学し保育者を目指す学生たちにとって、何よりも子どもと一緒に過す体験が、机上での勉強の裏付けとなり、実践体験として身に付いていく。知ること、見ること、考えること、手を動かすこと、身体を動かすことが自分を肥やす事につながり、その場を提供し、支える事が教師の役割の一つかと思える。

尚、2005年より、子育て支援は学科のカリキュラムに位置付き、理論と実践の科目担当者が配置され、親子広場は「おててつないで」と名称変更

したが、現在も継続している。

2009年担当者交代、さらに近隣の評判があがり、参加希望者が激増したことから、2010年度から、参加親子数の上限を設け、学生がそれぞれの親子を担当する体制をとるに至っている。

保育者養成の実践の場として出発した2種類の「どんぐり広場」であるが、現在地域社会から求められている子育て支援は、道内の他大学でも始めている。しかし、本学科では思考錯誤ながら他大学に先がけ18年前から親子参加の遊びの場を地域に提供することができたと考えている。

#### 謝辞

元藤女子大学保育学科教授 西千雅子先生はふたつの「どんぐり広場」を最初から中心となって活動し、学びあい、支えていただきました。それがあってここまで広場を運営することが出来ました。またこの稿を書くに当たっても多くの示唆をいただいた、西千雅子先生に心から感謝申し上げます。

#### 引用文献

註1. 幼稚園教育要領(平成20年3月 文部科学省告示第26号)

#### 資料・写真

資料1. 1991年 第28回 藤女子大学・短期大学 学園祭

第一回 「どんぐり広場」チラシ

資料2. 2009年 第18回 藤花祭 「どんぐり広場」チラシ

資料3. 1993年 大学祭「どんぐり広場」計画表 初めて学年別に行った年

資料4. 5.16条校舎 保育実習室 親子参加広場 「どんぐり広場」

新聞紙による迷路

資料6. 花川校舎 親子参加広場「どんぐり広場」 会場設定

資料7. 同上 子供たちへの見せる活動 パネルシアター